（万葉集）筑波の歌垣　　高橋 虫麻呂

鷲の住む 筑波の山の 裳羽服津の
その津の上に 率ひて
未通女 壮士の 行き集ひ
かがふ嬥歌に 人妻に 吾も交はらむ
吾が妻に 人も言問へ
この山を うしはく神の 昔より
禁めぬ行事ぞ 今日のみは
めぐしもな見そ 事も咎むな

【現代語訳】

鷲が住む筑波山の麓には、「裳羽服津広場」というのがあって、その湧水が出る所に、村人が若い男女を率き連れて集まってくる。歌い、踊り、飲食をするこの合コンで、よその彼女に声を掛け、ボクもナンパしようっと。
ボクの彼女にも、みんな、声を掛けてね。
神様がこの山を領された昔しから、歌垣は解禁の行事だよ。
今日だけは、愛ちゃんも見ないでね、エッチも咎めないでね。

令和五年三月十日

大中臣正比呂　拙訳

【解説】

筑波山の男体山は伊弉諾尊、女体山は伊弉冉尊を祀る山である。女体山あたりから流れ出る男女川（水無乃川）は伏流となる。
伏流水が湧き出る広場は、歌垣（婚活の宴）の後で、脱がされた衣服を着る場所であるからか、「裳を著く津」と云っている。
「津」とは、人が集う場所、水が湧き出る場所の、両方の意味を持たせた名称である。山に「港の津」がある筈もないが、男女川の水は、積もり積もって桜川に注ぐ。
裳羽服津は、今の筑波山神社の南東にある夫女之石がある辺りである。ここは、筑波山頂から下方に見えたらしく、男女に見立てた二つの岩を、二本の桜が相い対して枝を絡めていたと云う。

「言問」とは話しかけることであり、諸兄が実践されているナンパである。「めぐし」とは「ボクのかわい子ちゃん」という意味で、「愛（メグ、アイ）ちゃん」なる愛称の代名詞か。
高橋虫麻呂は奈良時代の歌人で、下級官僚でもあった。
筆者は、虫麻呂が筑波の歌垣に参加したとは思わないが、幻想と願望のうちに詠まれた長歌であることは確かである。本人は常陸の国に赴任したことがあったようだ。常陸国風土記の編纂にも関与したらしいので、筑波山の歌垣には詳しかったであろう。
常陸国風土記に次の歌がある。

筑波嶺に 逢はむと 言し子は
誰が言聞けばか 嶺逢はずけむ

（訳）歌垣のときに「こんど筑波嶺で会いましょう」と言ったあの子は、誰の誘いを聞いたからなのか、会ってはくれなかった。

筑波嶺に 廬りて 妻なしに
我が寝む夜ろは はやも明けぬかも

（訳）筑波嶺に廬を結んだのに、恋人もなく、歌垣の夜に一人で寝るなんて、早く夜が明けてくれないかなあ。

令和五年三月十一日

大中臣正比呂　記